

流れる星は生きている

藤原てい



藤原てい



流れる星は生きている

中央公論社

流れる星は生きている

一九八四年八月一〇日初版
一九九五年三月三〇日一七版

著者 藤原てい

発行者 嶋中行雄

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104

東京都中央区京橋二一八七七
振替〇〇一〇二〇四一三四

©一九八四 検印廃止

Printed in Japan
ISBN4-12-001312-X

目次

第一部 涙の丘

駅までの四軒

別離

無蓋貨車

終戦の日

夫との再会

南下しようか

新しい不安

とうもろこしの皮

夫よどこへ

涙の丘の上

無抵抗主義

ダイヤモンド・ダスト

泣かない児

流れる星は生きている

いまぞこいしき

六四 六五 四三 二一 七

第二部 教会のある町

氷の日時計

氷を割る音

オンドルの煙

虐待餓死

丘の下へ

墓場から来た男

齒型のついたお辛

結婚の申込み

白い十字架

確定的な愛の因子

春風に反抗する

石鹸売りの先生

議論を食べて生きている夫婦

乞食と同じもの

ふるえる手と唇

発狂した女

けがされた人形

六 六 六 六 六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

第三部 魔王の声

ゲンナージの黒手袋

温飯屋の手伝い

二人の子供と一人の子供

引揚げの機運動く

三百円儲けた話

団体の分裂

親書の秘密

赤土の泥の中をものがく

凍死の前

かっぱおやじの禿頭

二千円の証文を書く

市辺里につく

草のしとね

川を渡るくるしみ

死んでいた老婆

三十八度線を突破する

アメリカ軍に救助される

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

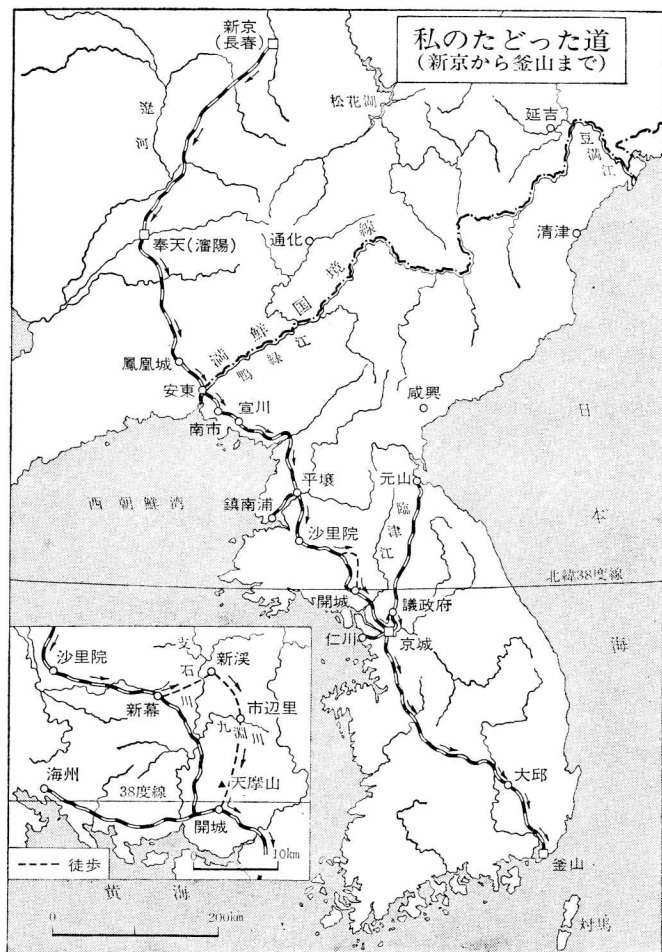
三〇

三一

恨みをこめた小石	三〇
気違いの真似をした法学士	三〇
議政府に到着	三一
コンビーフの缶詰	三二
貨車の中の公衆道徳	三四
百円紙幣を出す手品	三五
釜山にて	三六
肥った藤原と痩せた藤原	三七
子持ち女	三八
魔王の正体	三九
四千円の仮持参人	四〇
上陸の日	四一
上陸第二日	四二
博多から諏訪へ	四三
ああ遂に両親の手に抱かれて	四四
あとがき	四五

流れる星は生きている

私のたどった道
(新京から釜山まで)



第一部 涙の丘

駅までの四軒

昭和二十年八月九日の夜十時半頃、はげしく私の官舎の入口をたたく音が聞えた。子供たちは寝ていた。私たちは昨夜遅かったから今夜は早く寝ようかといっているところであった。

「藤原さん、藤原さん、観象台かんしょうだいの者です」

若い人の声であった。夫と二人でドアを開けると木銃を持った二人の男が立っていた。

「あ、藤原さんですか、すぐ役所へ来て下さい」

「一体何ですか」

夫が問い返した。

「何だかわかりませんが、全員を非常召集しているのです。ではお願いします」

二人の青年は非常に忙しそうに次の住宅をめざして出かけていった。ドアを閉めると同時に

私は軽い眼まいがした。私は夫を一人でこの夜の闇やみの中に出してやれないような気がした。

「あなた一人で大丈夫ですか？」

私は夫にいつてから、夫の眼の中に何か重要なものを読み取ろうとした。夫には何か私にいわないで隠しているものがあるように思われた。この二、三日夫の眼の中には何か不安の色があった。

「大丈夫だよ、心配しないで待っていなさい。来るときがとうとう来たようだ。そら、外の物音を聞きなさい、確かに今までの新京ではない」

私は耳を澄ませて外の物音を聞くと、遠く自動車の走る音、人の声、いろいろの物音が何か大きな変動の起る前兆のように月のない夜の空気をふるわせていた。

「やっぱりと来るときが来たのね」

私は狭い廊下に坐ると急に力が抜けたように、夫の丹前たんぜんの裾すそを持ったままふるえていた。

「馬鹿、なにいつている、早く用意をするのだ。すぐにでもここを出られるような用意を」

「ここを出るって、この家から出てどこへ行くんですか？」

「それは僕にもわからない。出るか出ないかもまだわかつてはいない。ただその心構えが必要なんだ」

夫はゲートルを巻くと急いで出かけていった。夫の勤務している観象台は新京の南端、南嶺なれいという郊外にあった。ここから歩いて少くとも三十分はかかる。そこへ行つてすぐ帰つてくるとし

でも、およそ一時間はかかる。私はどうしようかと二階に上った。二階の窓から見ると官舎街の電灯は灯火管制下であるにもかかわらず赤々と光を漏らしていた。今夜は私の家だけでなくこの家でも大変なことが起っているに違いない。その窓にうつる影はなぜか非常にあわただしく動いていた。私はこうしてはいられないとせかれる思いで非常持出しのトランクを開けた。冬支度を主とした子供のもの大人のものがきちんと整理してあった。非常食糧について私は考えた。若干の砂糖、乾パン、缶詰、それらのものはすでにトランクに入っていた。もしこれから新京を離れて遠く出るようになったならば、一体、このほかになにを持ち出したらよいであろうか。そう思うと無暗に心がせくだけで私は何を取り揃えてよいのか分らなくなってしまう。八畳の部屋に吊った蚊帳の中にいっばいになって寝ている子供たちの顔を見ると、とてもこの家を離れて遠くには行けそうに思えなかった。正広が六歳、正彦が三歳、そして咲子は生れてまだやっと一カ月になったばかりであった。リュックサックやトランクの中に品物を出したり入れたりしているうちに、私は急に淋しくなつて涙ぐんで来た。

私の力ではどうにもならないと思うと、私は夫の帰りをひたすら待つばかりであった。じっとして坐っていると遠くの方から自分の家を押しゆすぶるようにいろいろの物音が伝わって来た。窓から見ると大同大街を次から次と走るトラックのヘッドライトが、今まで見たこともない光の束を官舎街の白壁に投げかけていった。

夫が帰って来た。蒼白な顔を極度に緊張させて私の前に立った夫は別人のようにいった。

「一時半までに新京駅へ集合するのだ」

「えッ、新京駅ですって！」

「新京から逃げるのだ」

「どうして？」

夫はそれに対して言葉短かに説明した。関東軍の家族がすでに移動を始めている。政府の家族もこれについて同じ行動を取るように上部からの命令である。新京が戦禍の巷ちまたになった場合を考慮して急いで立ち退くのだとのことだった。観象台の他の家族たちもそれぞれ準備をしている。今すぐに出発しなければならない。

「汽車の割当てがきまっている、あと三十分で出発しなければならない、急ぐんだ」

夫は命令するようにいった。

「もちろんあなたも一緒でしょう」

私はこれ以上夫といい争えなかった。しかし、夫と一緒にならんとか出来るだろうと夫の顔を見た。

「駅まで送って僕は引き返す」

夫の言葉に私はぎくりとした。そしてこみ上げてくる悲しさと怒りで、私は常識を失った女のように激しい言葉を夫に投げつけた。

夫は仕事はまだ残っている。自分の立場としてももう少し後始末をつけてからでないと動けない

という風なことを私にいつているようだったが、私の言葉に圧倒されてやがて黙って私の眼を見つめていた。私は静かな夫の眼が私にそそがれているのを見てみると、とてもこれ以上いっても駄目だと思った。泣きくずれた私の肩に夫の手がかかって、

「さあ早く、子供たちを」

といった言葉に、私ははっきり母としての責任を意識した。

私は子供を護るために逃げるのだと、はっきり決心がつくともう泣いてはいられなかった。もう一回初めから荷物の整理をした。しかし、子供三人のほかにとれだけの荷物が持てようか、ほんの身の廻りのもの、子供たちの冬着だけで荷物はいっぱいになってしまった。

三歳の正彦を私が背負って、夫はリュックサックの上に咲子を乗せて、両方にトランクを下げ、正広はあるかせて新京の駅まで行くことにした。

ドアを開けるとさっと冷たい大気が頬にあたった。子供たちには着られるだけ着せ、私も冬の支度であったから大陸の夜の冷たさにはちょうどよかった。庭いっぱい植えたトマトの実を二つ三つ取って手さげに入れた。夫が早く早くとせきたてるので私は隣組の人たちに別れの挨拶あいさつもしなかった。せめて仲よくして下さった前田さんと佐藤さんのお宅にだけはお別れの挨拶がしたいと思ったが、今夜に限って他の官舎は灯がともっているのに、私たちの並び六軒の官舎はどの家も暗かった。私は心でさよならをいって大同大街へ出た。大同大街に出てもう一度私たちの二年間住んだ家を振りかえって見ると、ただ黒く四角な土のかたまりのように見えるだけであっ

た。

新京駅は大同大街を一直線にここからはるか四⁺料はあるだろう。一料も歩かないうちに私はへたばってしまった。咲子を産んで一月経^たつか経たない私には重い正彦は無理であった。大同公園のほとりに一息ついて私は生れて今まで感じたことのない悲しみに襲われた。眼の前をひっきりなしに通るトラックの上に軍の家族と荷物が満載されている。私たちのように子供の手を引いて行くひともある。ほんの二時間も前はあんなに平和に暮していた私たちが、どうして急にこんな姿で星空を見なければならぬのだろう。公園の繁みを越してほとんど水平に近く大きな流れ星が尾を引いて飛んだ。私はぞっとするような淋しさに襲われると、

「ねえ、帰りましょう、どうせ死ぬなら家で死にたいわ」

夫はなにもいわない。懐中時計を出しては星明りにすかして見ている。私に歩けといっているのだ。あと三料もこのまま歩いたら私は貧血で倒れてしまうだろう。

「ねえ帰りましょうよ」

私はどうにもならないことをもう一度いってみた。

別 離

新京駅の前はごったがえしていた。私たちの団体が五十名ばかり交通公社の前にかたまってい

るのを見つけて、

「ああ間に合った」

と夫はいった。知っていない人たちばかりであった。土の上にぐったりくずれるともう自分ではどうにもならないほど私の身体はつかれきっていた。軍の家族が続々と列をなして駅の中へ吸い込まれていく。私たちの出発は朝七時ときめられた。一枚の毛布を土の上に敷いて子供たちとともに丸くなって寝た。

夫が発発まで傍にいてくれるのが、せめてものなぐさめであった。

なにか大勢の人にかこまれているような不安な気持が私の頭の中に強く浮かび上って来た。妙にはこりっぱい空気を吸っているようで私は咳せきをして眼を覚ました。夜は明けていた。私は人の群の中にぎっしり囲まれて、踏みつけられそうになって眠っていたのであった。夫はいなかった。あたりを見廻すと目の前に顔見知りの大地さんの一族が元気な顔を並べていた。夫は役所へ連絡に行ったとのことだった。総務課長の柴田さんがいろいろの世話をやいていた。

「藤原さんはまだ来ないかなあ」

柴田さんが私の夫を待っているらしい。夫が来た頃はすでに七時は過ぎていた。乗車は九時だそうだ。

「台長はなんといいましたか」

待ちかねたように柴田さんが話しかけた。

「人選は適當に私たちできめるようにとのことでした」

二人はちょっと離れたところでこそそ話を始めた。人選とは私たち女子供の保護のためについでいく男たちのことであつた。四名の男が選ばれた。その家族たちは嬉しそうに自分の夫や、自分の父のそばに集まつた。

「団長は誰にする？」

柴田さんが夫の眼を見ていう。

「戸野さんがいいだろう」

夫はそういつているらしい。

「ねえ藤原さん、あんた行かないかね。あんたの家族が一番小さい子供さんが多い、台長には僕からよく後で話すから。どうせあと居残つたつて二、三日の問題ですよ」

夫は返事をしない。私はよろよろ立ち上つて夫に近寄つて、いつた。

「ねえ、あなた行つてよ」

夫はとがめるような眼で私を見ると、

「僕はいきません」

と、はつきり柴田さんにいつて、

「戸野さん、戸野さん、あなたがこの疎開団の団長と決まりましたよ！」

と皆に聞えるようにどなった。最後まで見榮と、ていさいのために、私たちを犠牲にしようと